

Dr. 和の町医者日記



不整脈シリーズ⑧

ICD (植え込み型除細動器) 体内に埋め込んで心臓の拍動を監視し、心室細動など命にかかわる不整脈が起きた際には電気刺激で正常に戻す装置。本体と導線からなり、導線は心臓に接続される。徐脈の治療のため電気信号で心臓を規則正しく拍動させる人工ペースメーカーと見た目は似ているが、やや大きい。

町医者を長くしていますが、医療の進歩を強く感じる領域のひとつが不整脈診療です。不整脈を検出する検査機器や人工ペースメーカー、ICD (植え込み型除細動器)、そしてアブレーション手術はこの30年間で素晴らしい進歩を遂げました。

以前、失神を訴える患者さんの24時間心電図をつけたところ、夜間の心拍数が1分間にたった10回しかないことが分かりました。すぐに専門病院で人工ペースメーカーを埋め込み、まさに危機一髪で救命してもらいました。あの時も24時間心電図をつけていなければ…と想像すると、ぞっとします。

心臓の電気信号の回路はたいへん複雑ですが、この患者さん



長尾和宏(ながお・かずひろ) 東京医科大学卒業後、大阪大第二内科入局。平成7年、尼崎市で「長尾クリニック」を開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る、総合診療を目指す。医学博士。近著「病気の9割は歩くだけで治る!」「薬のやめどき」「痛くない死に方」はいずれもベストセラー。関西国際大学客員教授。58歳。

は蛍光灯がちらつくように夜間だけ高度の徐脈に陥っていたのです。70代の元気な女性で、検診では特に異常がありませんでした。しかし、心臓のある1カ所だけが微妙に故障していたのです。まだ十分に走れる自動車のエンジンのネジが1本だけ緩んでいたようなものです。

たった1本のネジの緩みが検査で見えたので、治療につながりました。心臓全体の機能が衰えていたのであれば、それは老化なので根治できませんが、この女性の場合は医療の進歩の恩恵にあずかりました。10年以上経過した現在も元気に過ごされています。

あるスポーツ選手は発作性上室性頻拍を繰り返していたのが、アブレーション手術で完治しました。「安心してまた運動ができる」と大喜びされ、何時間もかけて治療した専門医に深く感謝されていました。

日本で初めてアブレーション手術が行われたのは、昭和59年です。これはちょうど私が医者になった年ですから、アブレーション手術の歴史は私自身の医者人生と重なります。しかし、カテテルから電流を流し患部を焼き切るという手法は当時、「心臓の中を燃やすとはなんて野蛮だ」と強い非難を受けたと聞きます。内視鏡手術や腹腔鏡手術を最初に試みた医師も、当初はみな犯罪者のような扱いです。

放置していいのか、危険なのか

不整脈外来

ただ、20年後にはそれが標準治療になり、むしろそれをしないほうが訴えられるようになります。いつの時代も医療の進歩とはそんなものです。そして、100年後には全く違う治療法が開発されているでしょう。もしかししたら、体の外から簡単に電気回路を修理できるようになっているのでは、と夢想しています。

以前も書きましたが、人間には誰しも不整脈があります。不整脈ゼロという人はいません。大半は治療をしなくても構わない良性的不整脈ですが、なかには放置すると突然死したり、重大な合併症が起きたりする可能性があります。危険な不整脈が混じっています。

かかりつけ医の役割は、それを鑑別することです。危険な不整脈を疑えば、不整脈の専門家がいる病院に紹介します。最近の循環器科は狭心症や心筋梗塞を扱う部門や心不全など心臓の筋肉を扱う部門、そして大動脈などの血管を扱う部門など、多くの部門に分かれています。

「不整脈外来」の看板を掲げる循環器科も増えてきました。

病気なのか、老化なのか、不整脈にはよく分からないところがあるのも事実です。不整脈の根治が可能な時代になりましたが、社会の超高齢化が進むなか、今後「どこまでを治療対象とするのか」という議論も活発化するのではないのでしょうか。